

# 薬の飲み忘れを防止する外的手がかりの有効性

○城尾裕子

(北九州市立大学大学院人間文化研究科)

松尾太加志

(北九州市立大学文学部)

医療事故では、薬物に関連するエラーが多いが、それに関連した研究は、医療従事者を対象としたものがほとんどである。しかし、薬物療法は入院中だけでなく、退院後や通院中の患者が、自宅で服用するケースも多く、患者自身が服薬する場面におけるヒューマンエラーを検討する必要がある。

ヒューマンエラーは、本人が気づかないため、外から気づかせることによって防止しなければならない。松尾(2008)は医療現場におけるヒューマンエラーに気づかせるしくみとして、外的手がかりの必要性を論じ、4つの外的手がかり(対象、表示、ドキュメント、人)に分類し、その効果について検討している。

本研究では、外的手がかりの観点から、薬の飲み忘れ防止について焦点をあてる。患者は、自宅で飲み忘れられない独自の工夫をしていると考えられ、在宅での服薬状況を問い、それらの工夫が外的手がかりの観点から有効であるかどうかを検討する。

## 方法

**調査対象者及び調査期間:** 病床数 575 床、診療科 20 の A 総合病院で、整形外科、心臓外科、呼吸器内科に入院及び通院患者の内、同意の得られた 75 名(男性 32 名、女 43 名)を対象とした。平均年齢 69.5 歳。調査時期は、2008 年 4 月～10 月。

**手続き:** 自由面接法で実施し、面接時間は 30～40 分程度とした。質問内容は、自宅における薬の飲み忘れの有無、薬の管理法、服用状況、薬の手帳や薬剤情報提供書の活用状況、人からの声かけの有無等とした。

## 結果と考察

### (1) 飲み忘れに対する回答

「飲み忘れはない」46 名(61%)、「どちらかという忘れはない」22 名(29%)、「どちらかという忘れ」3 名(4%)、「忘れる」4 名(5%)と回答があった。最初の 2 つの回答だけで 9 割に達していることは、飲み忘れのない工夫を患者自らが行っていることを示唆している。

### (2) 服薬の 3 つのプロセスごとの分析

**1) 薬を飲みはじめる時:** 服薬直前に、薬をどこに置いているかの問いに対しての回答は、食事をする「目の前」36 名(48%)、「手の届く所」22 名(29%)、「見える所」5 名(7%)、「別の場所へ移動」10 名(13%)、「家族が管理しているので知らない」1 名(1%)、「回答なし」1 名(1%)であった。「目の前」や「手の届く所」は、薬を飲むことの展望的記憶を想起させる手がかりとしての工夫だと考えられる。

表 1. 薬の管理法の外的手がかりによる分類

外的手がかり	具体的な管理法の例	回答者数
表示	1回に飲む薬を容器に分け、容器に「朝」などと表示	30名 (40%)
ドキュメント	薬袋のまま管理し薬袋に書かれた用法を手がかりとする	27名 (36%)
対象	1回に飲む薬を容器に分けるが、表示がしていない	13名 (18%)
人	他者からの声かけに頼る	1名 (1%)
外的手がかりなし	とくに分類せず、直接、薬の色や形で見分ける	4名 (5%)

ただし、26 名(35%)が「食後に薬を飲むのは、習慣」と回答しており、服薬行動が食事というイベントによって駆動され、すでに自動化された行動となっている側面もあることがうかがえる。

**2) 薬を飲む時:** 飲む薬を間違わないために、患者はそれぞれ薬の管理法を工夫しており、外的手がかりによって分類すると、表 1 のようになる。外的手がかりを利用せず自らの記憶に頼っている者が 4 名いたが、それ以外は何らかの外的手がかりを利用しており、それが飲む薬を思い出す想起手がかりとして働いている。

**3) 薬を飲んだ後:** 服用の回想的記憶があいまいになることがあり、飲んだかどうか気づく外的手がかりとして、対象(容器内やテーブルの上の残薬、水・お茶の残り、薬の殻の残り、残薬数と日付を照合など)20 名、人(他者への確認からの声かけ)3 名、ドキュメント(服薬チェック表やカレンダーに印)2 名と回答があった。

薬を飲むとき(展望的記憶)、飲んだかどうか(回想的記憶)の確認には薬の存在の有無、つまり対象が外的手がかりとして有効であった。しかし、どの薬を飲むかの情報(想起手がかり)については薬自身の色や形は何もアフォードしないため、1回に飲む薬を容器に入れることで 1回に飲む薬をアフォードさせたり、さらに表示によって区別させたり、あるいは薬袋の情報だけに頼ったりしており、患者個々の服薬の種類や用法に応じた外的手がかりの工夫がなされている。

## 参考文献

松尾太加志(2008). 医療現場におけるヒューマンエラーによる事故を防止する情報ディレクトリ 日本情報ディレクトリ学会誌, 6, 13-20.